# 教えの庭から

## 花祭りと観音霊場巡り

出雲市斐川町・仁照寺住職　江角　弘道氏

今日5月8日は、旧暦の4月8日です。この日は降誕会といって、お釈迦さまがお生まれになった日です。降誕会は、灌仏会とも呼ばれていますが、花祭りとも呼ばれて仏教の伝統行事です。各地の寺院では、春の草花で屋根が飾られた小さなお堂・花御堂が置かれ、その中に誕生仏をお祀りいたします。「誕生仏」とはお釈迦さま誕生のお姿で、右手で天を指し、左手で地を指しています。お釈迦さまは生まれてすぐ7歩歩かれて、このお姿をして、「天上天下唯我独尊」と宣言されたという由来に基づいています。

この「唯我独尊」という意味が、辞書には「この世で自分だけが偉い」とか「ひとりよがり」とありますが、もちろんお釈迦さまが「我は、宇宙でいちばん偉いのだ」と言ったわけではありません。仏教的な意味は、一人一人が尊いということになります。人間は一人では生きていけないので、皆が助け合って生きていくためにも、まず自分自身の尊厳を大切にしなくてはなりません。お釈迦さまの「唯我独尊」は、一人一人のかけがえのない存在の尊さを、私たちに気付かさせるようになっています。

挿絵　平尾恵郷

「天にも地にも、この世界において、ただ一人しかいない私という存在は何よりも尊い」という意味です。お釈迦さまは、自分という存在の尊厳を唱えたのであって、これは他の人もまた、一人一人が尊いということになります。人間は一人では生きていけないので、皆が助け合って生きていくためにも、まず自分自身の尊厳を大切にしなくてはなりません。お釈迦さまの「唯我独尊」は、一人一人のかけがえのない存在の尊さを、私たちに気付かさせるようになっています。

花祭りでお参りする際、仏さまに甘茶を注ぎかけて手を合わせます。このように仏さまに甘茶をかけてお参りするというのは、お釈迦さまのご誕生を天が祝福し、産湯として甘露の雨を降らせたという話が基になっています。出雲地方では、旧暦の日に花まつりをする寺がほとんどでしたが、最近は花まつりそのものをしない寺が増えてきました。以前は、大人も子供もお寺にお参りして、仏様に甘茶をかけて、拝みました。年配の方は、持参したビンなどに甘茶を入れてもらって帰った思い出を、懐かしく話されることがあります。

ところで、旧暦の4月7日、8日両日は、「出雲郡札三十三所観音霊場巡り」が斐川町で行われます。斐川町は、昔は出雲郡と呼ばれていました。伝承によると、同霊場巡りは元禄年間（1688～1704年ごろ）の初期に、永徳寺の初代住職・崑山和尚が、同寺境内の観音堂に始まり、吉祥寺境内の観音堂で終わる三十三霊場を開いたとのことです。仁照寺は、11番目になります。霊場巡りで歩く人は、紙の札の中央に「南無大慈大悲観世音菩薩」と書き、脇に家内安全などの為書き、施主名を書いた札を観音堂に納め、般若心経を唱えて回ります。子供の頃、札を打つ人が来ると、「ふだうっつぁーん、ええもんがっしゃい！」とはしゃいで、飴などをもらって喜んでいたことが思い出されます。

自然の大きな命のつながりの中で、私たちは生かされています。花祭りには、春に咲く草花の命を感じ、お釈迦さまのご生誕をお祝いしましょう。そして、観音霊場参りでは、特に今の世界情勢を思って、世界平和を祈りたいと思います。